〔駒沢女子大学　研究紀要　第27号　p. 15 ～ 24　2020〕

「ホモ・マキナリウス」との対比でとらえたホモ・サピエンスの認識特性

石　田　かおり*

Cognitive characteristics of Homo sapiens in comparison with “*Homo machinarius*”

Kaori ISHIDA*

Abstract

In last two papers we call human beings whose physical and conscious activities such as thinking and memory are all mechanized as “*Homo machinalius*”. We will discuss the consciousness and ego of “*Homo machinalius*” in comparison with those of Homo sapiens. The goal of this paper is to clarify the propensity of thinking of Homo sapiens.

At present, in addition to our existence as living human beings, we also have the existence of “Self as data”. Existence as data is rarely in line with the person’s intention, and many are irrelevant to the person’s intention. In Homo sapiens society, there is only one “person” in the world as a living thing, which is mortal. Although the person is not the “Person as data”（“Self as data”), there is an implicit consensus that it is useful mainly for commercial purposes.

In this paper, using the concept of “giving meaning”（in German “Sinngebung”）in Husserl Phenomenology, using “Self as data” as a starting point for consideration, “*Homo machinalius*” is an existence that does not need meaning. On the contrary to “*Homo machinalius*”, Homo sapiens cannot live without meaning. In that sense, I would like to add “*Homo significatio*” to one of the definitions of Homo sapiens.

1 この論文で扱う主題について

この論文は2017年と2018年に相次いで発表した「ホモ・マキナリウス」を巡る論文（注１）を前提にしている。それゆえ本題に入る前に、前提を共有しない読者のために「ホモ・マキナリウス」の定義についてここで確認しておく必要があるだろう。身体拡張技術や AI の技術などがさらに進んだ将来、われわれホモ・サピエンスが人体機能を非生物的なものに置き換えて不老不死の肉体を獲得し、個人の知識も思考も現在「ビッグデータ」や「共有知」などと呼ばれているものがさらに高度かつ広範に進化したものの所属となり、個体の限界を超えるようになることを想定したときに、現在の人類とは異なる性質の人類が登場すると考えられる。それを人類学者富田守の語を借りて「ホモ・マキナリウス」と呼ぶことにする。

このように定義して、「ホモ・マキナリウス」

*人間総合学群 人間文化学類

とはどのような存在であるのか、特に意識や自我の点について考察を進めた。その結果、前の論文（注１）の考察では､｢ホモ･マキナリウス｣にとって自我は必要不可欠なものでない、さらに、生涯１つだけのものではない、という結論に達した。このことから、ホモ・マキナリウスの自我について考察する際の対比相手となったわれわれ現行の人類ホモ・サピエンスは、自我が必要不可欠なものであり、なおかつ生涯に１つだけのものという形を取る必要があるということが明かになった。言い換えれば、自我という１つの概念についてホモ・マキナリウスとホモ・サピエンスを対照しながら検討した結果、ホモ・サピエンスの特性が明らかになったと言える。さて、ここからがこの論文の主題についてである。いま、「ホモ・サピエンスの特性」と記した。これは、思考を言語化して社会に公表するためには何らかの言語的表現を用いなければ不可能であるため、止む無く一時的に用いた表現であり、まったく学問的でも哲学的でもない、きわめて誤解の可能性が高いものであることは承知している。そこでこの論文では､｢ホモ・サピエンスの特性」という表現に託した内実を学問的に説明する。

2「データとしての私」

現在の社会では､クレジットカード､インターネット通販、交通系 IC カード、店舗のポイントカードなど、多様かつ多数の手段によって個人情報が収集されている。収集したデータを基に、AI を利用して特定の個人ごとにその人物の行動パターンや嗜好に合ったと AI が判断した商品が多数かつ多様な手段によりその人物が購買意欲をそそるような形で日々提案がなされている。受益者あるいは消費者からすれば、このような「勝手に送られて来た」提案（宣伝）を受け取ることは日常的になった。提案に対する反応は人によるし、場合にもよるが、いずれにしてもごく普通の日常となっている。こうしてデータ上には一定の「私」という各個人に関する個人像が存在する。そして、そのことをだれしもが漠然と了解しながら生活している。ここではそれを「データとしての私」と表現する。

日常的な意識では、言い換えれば非科学的意識では、「データとしての私」には複数の種類があり、それらはいずれもその人物の特定の面しか捉えておらず、「実在する本当の私」はきわめて複雑な存在としての「それ以上のもの」であると当人は考えている。さらに、これに対する「実在する本当の私」は唯一無二の存在であり、なおかつ生まれたときから現時点まで連続的なものであり、「実在する本当の私」を丸ごとすべて把握し了解しているのは自分自身以外にはないとも考えている。哲学ではこうした自己了解を根本から問う。「本当の私｣とは何か。「データとしての私」と「本当の私」は異なるのか。異なるとすれば差異はどこにあるのか。また、「本当の私」は存在するのか。なぜ存在すると言いうるのか。そもそも存在とはどのようなことなのか。…問いはいくつでもある。この一連の論文ではホモ・サピエンスとホモ・マキナリウスを対比的に論じているため、こでは「データとしての私」と「本当の私」の差異について考えたい。

筆者が当初から採用している方法はフッサールが現象学として確立した方法である。フッサール現象学最大の特徴は、存在を実態化しないまま認識形態をとらえることと言えよう。そもそも非学問的な認識である「データとしての私」の存在を実体化する者は現在のところだれもいないが、そればかりか、「本当の私」の存在も実体化せず、「存在している」という意味や「本当の私である」という意味を認識主体が与えているととらえるのが現象学的な解釈であ

る。このようなとらえかたをすれば「データとしての私」と「本当の私」の存在にはまったく差異がなく、区別できない。言い換えれば、「データとしての私」も「本当の私」も存在の一点においては同じであると言える。異なるのは存在という点でなく、主体が与える意味内容の点である。そればかりではない。もう1点異なる点がある。「本当の私」は当人が或る一定の対象に「本当の私」という意味を与えているが、「データとしての私」は当人が与えるのでなく、当人の与り知らぬところで機械的に判断されて与えられた「私」という意味である。つまり、意味を付与する主体が異なる。「データとしての私」を偽物のように感じたり、何か得体のしれぬ気持ち悪さを感じるとすれば、それは私を私以外の何者かが定義していることを暗黙裏に察知しているからである。

フッサールが活躍したのは19世紀終盤から第二次大戦前である。コンピュータ技術が本格化するのは戦後のことであるから、「データとしての私」を想定する必要がなかったばかりか、想像すら難しかったかもしれない。しかし自分以外の者が自分を定義する事態は現代の「データとしての私」に限らない。たとえば国家は、国籍、戸籍、住民台帳、マイナンバー、自動車運転や医師・弁護士等の交付した免許証、納税記録、年金記録、裁判記録、犯罪歴、出入国記録など多様な手段を組み合わせて個人を特定することが容易にできる。これも「データとしての私」の一種であり、歴史的に古くから行われている。そしてこれもまた、当人にとっては「本当の私」の一面だけをとらえたものと認識されるのが日常的な感覚であろう。さらに、「本当の私」とこの古くからある「データとしての私」は、インターネット上の「データとしての私」同様に、存在という点で差異はなく、差異があるのは意味付与の主体と意味内容である。

ここまで見てきたように、自分自身とインターネット空間での情報、国家などの行政機関が把握する情報、これらは「私」という人物に一定の意味を与える存在者であるが、このほかに「私」という人物に一定の意味付与をする存在者がある。それは他者である。自分が了解している「私」と他者が了解している「私」に何らかの齟齬があることが明かになり、違和感を持ったり反発を感じたりすることは珍しくない。これもまた「データとしての私」の場合と同様、存在の点で差異はなく、差異は意味内容と意味付与の主体である。

3 意味付与と実在・存在の問題

「データとしての私」の問題について考える際に、ここでもう1つの例を用いて異なる方向からもアプローチを試みたい。国民的に有名な芸能人の場合を考えてみよう。その人物のファンクラブに入り握手等で接したり、コンサートに行き直接当人を見るなどの形で直接その人物を経験する人はごく一部で、多数の人は生涯その人物をテレビ番組や報道等のメディアを通じてしか接しない。このような場合、直接的な経験のない多数の人にとってその芸能人は「データとしてのその人」と言うことができる。2019年、その時点ですでに故人であった歌手美空ひばりが「AIひばり」として「復活」し、コンサートに登場し、さらに年末の有名テレビ歌謡番組にも登場して話題になった。どのように故人を「復活」させたかというと、まず膨大な録音データとして残っている当人の歌声と話し声、画像データとして残っている仕草をAIに学習させた。さらに、背格好の近い生存し活動中の別の歌手が美空ひばりの衣裳を着て仕草や歌い方を真似て歌ったデータもAIに学習させるなど、故人のデータを補強するよう工夫をし、その時点での最高の技術を使って美空ひばりを「再現

前（représentation）」することを試みた。コンサートの聴衆は美空ひばりの関係者やファンがほとんどだったので、感激した者が多かったようだ。しかし、美空ひばりに特に思い入れのない人もいる上に、美空ひばり没後に生まれて美空ひばりの名前は知っていてもそもそもよく知らないという世代も増加したためか、2019年年末のテレビ番組での登場に対しては賛否を含めさまざまな意見が見られた。意見の内容や賛否についてはここでの論点に無関係である。この例からここで問うべきことは、かなりの数に上ると推測される美空ひばりの実体験を持たない人にとって、生前にテレビで視聴した美空ひばりと「AI ひばり」のテレビ放送の視聴に違いがあると言えるのだろうかということだ。そうした人にとっては生前の美空ひばりの場合も AI ひばりの場合も、いずれも美空ひばりは像（イメージ）であるため、本質的に変わるところがないと言えるのではないか。たとえば毎日テレビのニュースで見ているアナウンサーを、われわれは無意識的・無条件的に実在する人間のアナウンサーだと思っている。しかし、それが実在の人物でなく制作された画像に AI 音声を充てたもので、たいへん精巧にできているのでテレビで見る限りでは生身の人間と変わらないバーチャルアナウンサーだとして、ある時点でそのことを知ったとしたら、視聴者にとって一体何か変わるのだろうか。単に驚くことはあるかもしれないが、変わる点はまったくないのではないか。さらに言えば、生身の人間でもバーチャルアナウンサーでもそのようなことは問題にならないのでまったくどうでもよいことで、それゆえ同じ意味であると言えるのではないか。

AI ひばりやバーチャルアナウンサーの例は「像としての他人」と言える。「像としての他人」は前述の「像としての私」と対をなし、われわれの存在の問題を考える契機になる。さらに考えを発展させれば、友人でも、職場の同僚でも、家族でも、よく知っている人物の存在は自分にとっては像として認識されるものに「実在している」という意味付与をしているという考え方を取るならば、目の前に友人がいると思っていたのがバーチャル友人だったとある時判明したとしても変わりないことになりはしないか。実際に見たことのない有名芸能人やアナウンサーは映像メディアでしか触れないからバーチャルと変らないことは認められても、実際に会って話をし、身体的接触を持った経験もある範囲内の他者はそれとは異なるという感覚が、日常的な（非哲学的な）感覚であることは重々承知だが、どの点がバーチャルと異なっていると説明できるのだろうか。そうした実在や存在の問いもこの問題を考えると浮かび上がってくる。

この問いをさらに進めれば、自分自身の実在性や存在にまで問題を拡げうる。自我も像であると考えるのが現象学の考え方であるので、自分の存在がリアルなのかバーチャルなのか、区別をつけることができるのだろうか。可能だとしたら、どのような方法と理論になるのか。日常的な（非哲学的な）感覚では、自分自身のことは疑いなく「明晰判明に」自分でわかっていのだから、そのような問題は生じない、ナンセンスだということになろうが、果たしてそうだろうか。

ここでデカルトを持ち出して、このような問いを発して考えている自分自身が存在しないことには問いも思考もないのだから、自分自身の実在・存在は疑い得ないという結論に達してしまうと哲学史の半分がなかったことになってしまう、いや、現象学的観点に反することになる。そのように「自分」や「自我」や「実在」や「存在」という意味を付与している作用は認めるが、あくまでもそれは意味であり、意味付与の対象の実体化はしないのが現象学的態度である。実

体化しないのなら実在や存在を語ることはできない。実体化をしなければ、バーチャル（非実在）とリアル（実在）の区別をつけることはできないのではないだろうか。「データとしての私」について検討したときと同じである。「データとしての私」と「私がとらえている私」は意味付与の内容が異なるだけであり、いずれもみな「像としての私」であることに変わりない。

実在や存在を疑い始めて袋小路の奥まで到達したのが独我論である。ここで独我論を持ち出して、すべて「私」が存在を信じているから存在しているに過ぎないし、そのような人物であると「私」が考えているからそういう人物なのだ、と、すべては「私」の想像の産物だと片付けることは簡単である。このような考え方は古くから存在する。この世はすべて「私」の妄想だという説だ。しかし突き詰めて行けばそうは行かない。デカルトが指摘したように、妄想の主（主体）である「私」とは何かという問題が残り、独我論の枠組みの中では決して解決されないからだ。

この論文に至るまでの一連の論文で思考の方法として採用しているフッサール現象学がこの問題に答えている。「私」という存在は体験を通じて体験主体が与える意味に過ぎない。「私」を実体視せず、多様な意味の交点に過ぎないとフッサールは考える。さらに、フッサール現象学のこの「意味付与」の考え方を用いれば、前述の AI ひばりに対する反応の差も説明できる。美空ひばりの関係者やファンと、たまたまテレビで見た経験が何度かある程度のよく知らない人や没後世代などとの差は、美空ひばりという人物についての情報の量と質であると考えられる。もし AI ひばりの完成度がさほど高くないとしても、美空ひばりについて持っている情報の質と量がともに高い人物が AI ひばりを見る場合は、意味付与が豊富にかつ深く行われるため、生前の美空ひばりを見ている経験に近い経験をすることになるであろう。しかし美空ひばりについての情報の量も質も貧弱な者が AI ひばりを見る場合は、意味付与が十分に行われないため、よくあるボーカロイドの一種と区別がつかず、評価が高くなる可能性はきわめて低いと考えられる。

類似のことは日本の伝統文化にもよく見られる。たとえば能や狂言のきわめて抽象度の高い表現が一例である。一般的な演劇の大道具は、場面を具体的に表した建物や風景などである。しかし能・狂言の大道具は終始松羽目だけで場面転換に大道具の転換がない。小道具もきわめて抽象的なものを必要最低限しか用いない。そうすることで、演技によって多様な道具に変わりうるような使い方をしている。能・狂言についての経験や知識が豊富な者が見れば十分な意味付与がなされるため深く豊かな鑑賞が成り立つが、知識や経験がほとんどない者が見ればよくわからずつまらないという感想を持つかもしれない。日本の伝統文化には類似の例が多数ある。枯山水の庭園では、砂や石が大山や海や河川などの壮大な景色を想像させるきっかけとして置かれている。茶席の薯蕷饅頭が１年中まったく同じ形と作りであっても、表面の色や焼き印などのごく一部を変えることですべての季節を表すことができる。これらの例は、見る者の想像力を最大限に働かせるために最小限の想像のためのきっかけを作るという表現方法である。ここでの見る者の想像力が「意味付与」である。日本の伝統文化の文脈や古典芸能の文脈を共有しない者にとっては、きっかけがきっかけとしての役目を果たさず、それゆえ意味付与ができないかまたはきわめて不十分にしかできないため、何が行われているのかわからない、あるいは何が表現されているのかわからないことになる。まさに「意味が分からない」事態である。

反対に文脈を共有する者にとっては十分な意味付与が行われて、十分鑑賞し堪能し、深い感慨抱くことができる。

意味付与は人間の認識の形態である。本稿までの一連の論文のテーマからすれば、意味付与はホモ・サピエンスの認識と思考の形態の特質とであると表現した方が適切であろう。たとえば虹を例に考えると、虹を観測できるメカニズムは既に科学的に完全に解明され、広く知られている。それにもかかわらず我々が虹を見るときには「幸運だ」とか「嬉しい」とか「きれいだ」などの感慨を抱くことがしばしば見られる。中には虹に向かって願い事をするなどの行動を起こすに至る者もいる。美を感じること、すなわち対象に美という意味付与をすることは、ホモ・サピエンスの認識の中でもその特質を代表するものだと考えられている。カントを引き合いに出すまでもなく、これまで多くの哲学者が美を人間の認識の中でも最も高度に精神的で人間的なものであることを指摘してきた。カントはそれを「崇高」という語で表した。たとえば犬や猫は虹ばかりか「モナ・リザ」にもバッハにも無関心であると言われてきた。個人的な話題で恐縮ではあるが、猫と生活した経験やその他の知識から、筆者は音楽に関しては人間以外の動物が無関心とは限らないばかりか、音楽に関心を示し、なおかつ個体によって音楽の好みが異なることも知っている。しかしそうであっても、言語を持ちなおかつ言語の違いを超えて意思疎通ができる人類が持つ「美」という概念と同じような概念を他の生物が持ち、それを対象に美という意味付与を行っているかどうかは現時点まではまったく知り得る手段がない。それにもかかわらず、敢えてここでは、意味を創り出し対象に意味付与をすることがホモ・サピエンスの認識の特質である点は指摘しておきたい。その理由の１つは、意味付与がホモ・サピエンスの認識様態であることは間違いないからだ。もう１つの理由は、ここで論じているのはホモ・サピエンスと他の生物の比較ではなく、ホモ・マキナリウスとの比較であるからだ。

4「意味に無関係に生きられる存在」と「意味がないと生きられない存在」

思考を先に進めよう。ホモ・マキナリウスの技術的背景にはAIが存在するが、AIは「美」という概念を持つのだろうか。言い換えれば、意味を創り出したり持ったりすることができるのか。これが次の問題である。よく知られている譬え話しに、サルがキーボードを叩くと膨大な時間はかかるがいずれシェイクスピア作品が出来る可能性があるというものがある。サルの例とAIが決定的に異なる点は教師データである。教師データは単に正解を出す確率を高めるのでなく、特定の結果を出すことに焦点が当てられている。AIが膨大な既存の俳句を学習した結果の句作や、既存のヒットポップスを膨大な数学習した結果の作曲が既に試みられ、ある程度の成果があがっている。現在までのところ多くの人が感心する句やヒット曲が生まれたという話しは聞かないが、広く社会に芸術作品として認められるものをAIが創り出す日は遠くないと言われている。仮にAIの作品に人類の大多数が文化的あるいは芸術的な作品だと認め、さらには素晴らしい作品であると価値を高く評価し、そこに美という意味付与を行う場合があるとする。この場合、作品に美や価値という意味を付与するのはホモ・サピエンスであって、AI自身が価値や美などの意味付与をするわけではない。AIは出来上がった句や曲によいという価値を見出して社会に発信するのではない。それゆえ、AIとそれを搭載したホモ・マキナリウスが意味付与をする存在になりえない。

しかし、AIとそれを搭載したホモ・マキナ

リウスが意味付与する存在になえないと断言できるのか。ここで敢えてこの問い立てたのは、ホモ・マキナリウスによる意味付与があるとすればそれはどのようなものか考えることで、ホモ・マキナリウスの認識特性が明らかになる可能性があるからである。さらにはそのことによりホモ・サピエンスの認識についても何らかの学問的成果があるかもしれないからである。ただし、この問いを考える上で忘れてはならないことがある。それは、ホモ・サピエンスの意味付与とホモ・マキナリウスの意味付与はまったく別物であり、この２点を決して混同してはいけないことだ。ホモ・マキナリウスの意味付与は従来の「意味」という語の文脈とは異なる文脈にあるということだ。このことを決して忘れてはならず、それが研究上重要な点である。

前論文の論拠としてたびたび引用した西垣徹のような AI の技術的理解と哲学的理解の双方を十分に備えた研究者は、誰しも異口同音に AI は意味を理解してアウトプットしているのではないと言う。近年急激な進展を見せている画像認識によるディープラーニングの結果の物事の判別のように、現在のところ AI は意味付与をせずに物事を認識して行動などのアウトプットに移しており、今後もそれは変わらないという考えが有力である。前論にも記したように筆者もこの説に与する者である。このことから、ホモ・マキナリウスとホモ・サピエンスを分ける大きな要因として、意味付与の有無が挙げられると言えよう。

前回の論文の結論は、ホモ・マキナリウスにとって自我と自己同一性は必要のないものであり、一方ホモ・サピエンスにとって自我と自己同一性はなくてはならないものである。この点がこの２つの存在者を決定的に隔てる点である、というものであった。自我も自己同一性も当人の意味付与によって生まれ、生ある限り更新され続けるものである。言い換えれば、ホモ・マキナリウスは意味を求めることが必然的でもなく必要性もない存在であり、一方ホモ・サピエンスは意味を求め意味を得られなければ（意味付与ができなければ）生きて行くことができない存在ということができる。前者は意味があるなしに無関係に生きられる存在であり、後者は意味がないと生きられない存在である。

さて、このことを明確に確認したところで、ホモ・マキナリウスが人口の多数を占めるようになった「人間社会」を想像してみよう。

前述のように美は意味である。意味に必然性を見出さないホモ・マキナリウスが支配的な社会では、芸術活動は必要性がないものになる。それゆえ芸術活動は低調になるか、ほとんどなされなくなる可能性がある。芸術活動は遊びの要素を多分に含んでいる。ここで言う遊びとは「ホモ・ルーデンス」、すなわち目的達成のために最も合理的な手段を選ぶこと以外は不要であるという合理的態度とは対極にある態度を指す。この意味で遊びが主要な要素を占める人類の活動（文化）はすべて不要なものということになる。芸術のほかにスポーツ、ゲーム（近年 E スポーツともいわれるがエレクトリックの力を借りないものも含めてゲーム全般）、賭け事、旅行など、ホモ・サピエンスが趣味や娯楽、レジャーなどと呼ぶ行為全般が必要性を見いだせないものになると考えられる。

学問は究極には意味を追い求める行為である。驚き（*θαυμάζειν*）や「なぜ」という疑問から学問は始まることから、学問の目的地点は了解である。了解とは物語を作ることができ、その物語が納得できるものである状態である。こうしたことから、ホモ・マキナリウスにとって学問は必要でないものと言うことができる。ただし、ホモ・マキナリウスの身体は機械で頭脳は AI であることから、自身のメンテナンスや発

展のための機械的身体とAIに関する研究開発は必要性があるのでそれは発達することが見込まれる。しかし、その他の分野は単なる「趣味・嗜好」にすぎないと考えられる。

物語は意味である。それゆえ物語も必要なものではない。したがって、ホモ・サピエンスの間で物語として認識されることにより個人的あるいは社会的に価値を見出されていたものはすべて必要ないものになり、その価値が著しく低下する。たとえば人生を振り返って認識し、人生に何らかの意味を見出すことや、茶道具に代表されるような物の物語性の価値、職人技、スポーツ、衣食住の文化、などなど、ホモ・サピエンスが日々連綿と微細な点まで気遣いながら追い求め伝え続けてきたものは価値がなくなる。それゆえこれらすべては不要なものになるため、生活も社会も一変し、ホモ・サピエンスには理解し難いまったく異質のものになることが予想される。

とはいえ、ホモ・マキナリウスの頭脳であるAIの教師データは、われわれホモ・サピエンスの発する言語や画像である。言語や画像の発信者であるホモ・サピエンスの個人個人の背景となる文化という文脈を背負った教師データである。いずれホモ・マキナリウスが「代を重ね」る（不老不死のためこの表現が妥当かどうか考える余地があるが、ホモ・サピエンスの感覚で表現すると）ことで教師データにホモ・サピエンスの残滓がなくなるまでは、ホモ・サピエンスの価値観が何らかの形で残り続け、その結果物語性に何らかの意味があるかのような思考と思考に基づく振る舞いが見られるのだろう。こうしたことから、教師データを使ったディープラーニングの技術が使われている限りAIの学習もタブラ・ラサではないし、先入観がないものでは決してないということになる。AIはホモ・サピエンスの価値観が反映された教師データに基づく判断をすることから、意味は必要がなくても何らかの価値があるかのような振る舞いをする可能性はある。

繰り返すが、ホモ・サピエンスは意味がなければ生きられない存在であることをこれまでに確認した。現象学的にとらえれば、われわれの認識は意味付与の連続である。言い換えれば、ホモ・サピエンスの一生は意味付与の連続的な実施の積み重ねと表現することもできる。そして、意味付与は文化という文脈に依存しているものが多いため、文化による差異は見られるが、その一方で文化の差異を超えて人類共通のものもある。親しい人間に対するもろもろの感情などはその一例であるが、学問の基礎となっている概念もまた文化の差異を超えて人類共通のものである。数学における諸概念が典型的な例である。時間もまた人類の諸文化に共通の概念である。かつては文化によって異なる時間概念を持っていたが、近代化の進展により文化による差異の消滅が進んだ。2018年物理学者のカルロ・ヴェッリが『時間は存在しない』を著し、世界的な話題作となった。邦訳が発売されてから1年半ほど経たこの論文の執筆時点でも、東京近郊の中規模書店の店頭に平積みされているほどである。本書の趣旨は次のようなものである。時間とは、人類など時間について究明できるような知的生命体が存在するかしないかに無関係に、宇宙に普遍的に存在している物理法則であると考えられているが、実はそうではない。時間が存在すると人類が考え続けたから時間は存在する。一言でいえば、時間は人類の思考の産物にすぎない。ヴェッリ本人も書いているように、この書物と同じような考え方は古代ギリシャ以来いくつも存在している。ヴェッリを始めとする類似の時間に関する考え方について、「人類の特性」という表現を用いれば次のよう

になる。「時間という概念と、時間が存在するという概念は、人類の特性に由来するものである。」

ヴェッリの説に基づくならば、時間も意味付与の結果であるため、ホモ・マキナリウスにとって時間は必要とは限らないものかもしれない。「かもしれない」言ったのは、時間は物理的な性質でもあり物質の変化に伴う場合があるため、機械的身体を持つホモ・マキナリウスにとって機械上の必要性から時間が必要な概念である可能性が残されているからである。しかし、意味という点ではホモ・マキナリウスにとって時間は不要なものである。人生を振り返り意味を味わうという先述の例には時間という意味が大きな要素を占めている。また、自己同一性は時間概念なしに成立しない。自己同一性は記憶がなければ持つことができず、記憶は時間に関わるからだ。それゆえホモ・サピエンスにとって時間は自身の存在にとって不可欠のものということになる。その一方でホモ・マキナリウスには時間は必要不可欠なものではない。

いま少し先走って言及してしまったが、自我と自我に基づくアイデンティティは記憶によって形作られる。交通事故により記憶喪失に陥った人物の例がある（注２）その人物は、事故による身体的損傷の治療を終えて退院した後は、記憶がないことで社会生活が困難になってしまったことから記憶を取り戻したいと真剣に願っていた。しかし、事故から時間が経つにつれて事故後の「新たな記憶」が積み重なり、やがて記憶が戻ることを怖れ、記憶が戻らないことを願っていることを自覚した。アイデンティティや自己イメージは事故の前と後で異なることは、自分を知る人の話や事故前の写真などから本人も了解している。もし記憶が戻ると、事故前と事故後の異なるアイデンティティや自己イメージの間をどのように整合性を付けて生きていくのかという問題が生じることを、本人も気づいている。この例のように記憶は物語としての形式を持っている。自我、アイデンティティや自己イメージもまた物語の形式を持っている。情報そのものは１つ１つの断片であるが、それらをつなぎ合わせて１つの物語にすることは意味付与である。

5「複数の自分」に由来する個体識別問題

データは容易に複製できる。しかもデータはオリジナルとコピーという区別が成立しない。身体がすべて機械化されたホモ・マキナリウスは複製が容易で、同じ「人物」が複数同時に存在することが可能である。そうした場合はオリジナルとコピーの区別がなく、同じ個体が複数同時に存在することになる。ホモ・マキナリウスが実現するような未来の技術がどのようなものであるかわからないが、現在の AI 技術の延長という条件の下では、複数の同一人物が製造された場合、製造時点では記憶が同じでも、それぞれの個体が「生きて」経験を積むことにより機械学習の内容に差異が生じることから異なる思考様式や嗜好を獲得することが考えられる。その結果個体識別問題が解決できる可能性が残っている。身体も記憶も何もかも個体に必然的に結びつくものでないホモ・マキナリウスだけが人類として存在する社会では、おそらく「複数の自分の存在」は問題にならないだろう。しかし、ホモ・サピエンスとホモ・マキナリウスが同時に存在する場合は、ホモ・マキナリウスの「複数の自分の存在」と、「複数の自分」の間での個体識別は、大いに問題になる可能性が考えられる。それは２種の人類の間の思考様式が完全に異なるものであるからだ。次のようなケースも考え得る。家族の死の事実を受け入れることが難しい人物が、死亡した家族をホモ・マキナリウスで「再現」して一緒に生活をする

ことを続けた場合、ホモ・マキナリウスになった故人がその後の「人生」経験による学習によりホモ・マキナリウスを発注した人物にとっては予想外の受け入れ難い人間性を獲得してしまうことで、発注元の人物にとって大問題が生じる場合である。発注主にとっては生身の人間のホモ・サピエンスの「豹変」とは異なる受け止め方をするのではないか。

6 結論　意味という宿痾

AIに対して批判的な（価値を差し挟まない意味での批判的）研究者は異口同音にAIは意味を理解しないし意味を産み出さないと言っている。意味がAIと人類を分ける決定的な点であるという。現象学的考察の結果から、何かの対象に意味付与をし、意味を求め続けるか否かがAIと現行人類を決定的に分ける点であることが明かになった。キェルケゴールは「絶望とは死に至る病である」と言った。それに準えれば、「ホモ・サピエンスにとって『意味』が見いだせないことは死に至る病である」ということができる。意味を求めて瞬間瞬間に意味を創り出しながら毎日を生きているという意味で、意味の病にとり憑かれた存在、それがホモ・サピエンスの存在様態である。この文章を筆者は価値観を差し挟まずに記したのであって、決して悪い意味を込めて「病」と言ったのではない。なにか「正常」な状態がほかにありそれに対する「病」という意味ではない。やむにやまれず常に行ってしまう中毒状態であることから病という語を使った。実際、意味を見出せない、あるいは理解できない状態に陥ると病理学的に言う病気の状態になる。意味がなければ生きて行かれない。われわれは意味という宿痾を持つ存在である。

ホモ・サピエンスの定義に言語の使用や直立二足歩行などいくつかある。筆者は以前、化粧の哲学的研究の結果「化粧する動物」という定義をそこに加えた。今回の研究から「意味がないと生きられない動物」あるいは「意味を求める動物」ということで、“*homo significatio*”という定義を加えたい。

注

1　拙論「ホモ・マキナリウスのアイデンティティと化粧」，駒沢女子大学研究紀要第24号，2017年および「自我の解消」，駒沢女子大学研究紀要第25号，2018年

2　坪倉優介『記憶喪失になったぼくが見た世界』，朝日新聞社，2019年